

【目的】回復期病棟において入棟早期から脳卒中患者の退院時ADL自立度を予測する事は非常に重要である。Berg balance scale(以下BBS)はバランス検査法であり、全体的なバランス評価・歩行自立の1つの指標として用いられている。本研究の目的は回復期病棟入棟時BBSと退院時ADL自立度の関係性を明らかにし、退院時セルフケア及びADL自立を予測する入棟時BBSのカットオフ値を算出することである。

【対象】2015年6月から2016年12月の間に当院回復期病棟を退院した脳卒中患者178名のうち、発症から回復期病棟入棟まで30日以内であり、回復期病棟入棟時にBBS46点未満(歩行自立不可レベル)の患者33名(女性15名、平均年齢74.0±10.8歳)を対象とした。

【方法】回復期病棟入棟時BBS・退院時Functional Independence Measure(以下FIM)運動項目をカルテより抽出し検討した。退院時FIM運動項目(以下M-FIM)の70点以上をセルフケア自立、80点以上をADL自立とし、それぞれの自立・非自立を予測できる回復期入棟時BBSのカットオフ値をROC曲線を用いて算出した。

【結果】回復期病棟入棟時BBSと退院時M-FIMの間には相関関係が認められた(相関係数 $r=0.549$ 、 $p<0.001$)。また、退院時のADL自立度を予測する回復期入棟時BBSのカットオフ値はセルフケア自立では36点(感度73%、特異度83%)、ADL自立では39点(感度75%、特異度84%)であった。

【考察】今回、入棟時BBSが39点以上であってもADL自立まで至っていない症例の特徴として麻痺の改善度が低い(Brunnstrom stageIVレベル以下)、認知機能が低下している(FIM認知項目26点未満)といったものが見られた。今後は麻痺の程度や高次脳機能障害などの因子に着目し検討することで、より多くの患者に対しての予後予測が可能となると考える。